



==== 本部より ====

藤井賞の創設について

会長 浅島 誠

昨年、急逝されました東邦大学故藤井良三先生のご遺族より、本会は300万円のご寄付を頂戴いたしました。故藤井先生の御意志に沿うべく、理事会・評議員会で、そのふさわしい用途につきまして、検討を続けてまいりました。その結果、論文賞受賞者の中で特に優れた論文に賞金を授与する「藤井賞」を2003年より創設いたします。賞の規定は下記の通りです。会員皆様におかれましては、Zoological Science へのより良い論文のご投稿をお願いいたします。

(社)日本動物学会「藤井賞」選考規定

1. 対象者

「藤井賞」の受賞候補者は前年度の「Zoological Science」の論文賞 (Zoological Science Award) の受賞者の中から特に優れた論文、1件 (1論文の著者および共著者) に与えられる。

2. 賞金等

「藤井賞」には賞状の他、賞金20万円が贈呈される。

3. 選考委員会

「藤井賞」の選考委員会は、会長、常任理事、編集主幹の他、理事・評議員の中から数名をもって構成される。

4. 選考方針

「論文賞選考委員会」は各々の受賞論文についての内容および選定理由書を「藤井賞」選考委員会に提出する。「藤井賞」の選考委員会は提出された選定理由書は参考にするが、動物学の今後の発展性や論文内容の質の高さ、オリジナリティーなど、総合的に検討し、「藤井賞」選考委員会の独自の学問的判断に基づいて「藤井賞」を決定する。

5. 発表

「藤井賞選考委員会」で選考された「藤井賞」受賞者

該当論文 (者) については、理事会、評議員会の承認を得て公表する。表彰は日本動物学会の大会の総会において行う。

6. その他

- (1) 「藤井賞」は当該の選考委員会で前年度の論文賞の中から選考されるが、総合的に判断して、「藤井賞」に値すると思われる特段に優れたものがない場合には、見送るものとする。
- (2) この選考規定は2003年3月より施行するものとする。ただし、規定については、5年ごとに見直すものとする。

科研費審査員予備者グループ作成のための選挙
(結果)

先般行われました「科研費審査員予備者グループ作成のための選挙」は、3月17日に投票が締め切られ、3月19日午後1時より、選挙管理委員の東京大学広野雅文会員とアルバイト7名により開票作業が行われました。

結果は下記の通りです。この後評議員による選挙を経て、平成16年度審査員を学術会議動物科学研究連絡委員会からの通知に従い、学会から推薦することとなります。

会員の皆様のご協力ありがとうございました。

細目名：基礎ゲノム科学

細目内分割：基礎ゲノム生物学 (総投票数 175票)

佐藤 矩行	小原 雄治	武田 洋幸	堀 寛
赤坂 甲治	上野 直人	西駕 秀俊	酒泉 満
斎藤 成也	成瀬 清	三田 和英	阿形 清和
浅島 誠	石川 統	五條掘 孝	颯田 葉子
城石 俊彦	鈴木 範男	津田 基之	長濱 嘉孝
野中 勝	久富 修	深田 吉孝	藤原 晴彦
山本 博章	和田 洋	相垣 敏郎	青塚 正志
阿部 周一	阿部美紀子	荒井 克俊	荒木 和男
井内 一郎	泉 進	岩見 雅史	上田 龍
大竹 英樹	岡野 俊行	尾崎 浩一	小原 収
甲斐智恵子	笠原 正典	勝木 元也	金久 實
神谷 律	河野 晴一	木島 明博	清原 貞夫
日下部岳広	久保 健雄	黒澤 良和	古賀 章彦
西郷 薫	榊 佳之	沢田 均	柴本 成俊
嶋 昭紘	鳶 洪	嶋田 透	清水 信義
平良 真規	高木 信夫	舘 鄰	筒井 和義
徳永 史生	富岡 憲治	富野 士良	長澤 寛道

中辻 憲夫	西田 睦	根本 孝幸	野呂千加子	中村 正久	中村 將	夏原 由博	西平 守孝
橋爪 篤史	長谷川由利子	服部 正平	濱口 哲	野崎 眞澄	長谷川 博	花里 考幸	疋田 努
藤沢 敏孝	布山 喜章	古川 泰弘	星 元紀	日高 敏隆	日高 道雄	藤田 剛	丸山 工作
前野 貢	松田 洋一	水上 惟文	安増 茂樹	水上 惟文	宮下 道	宮田 隆	森脇 和郎
山下 倫明	山本 正幸	吉里 勝利	米川 博通	谷田 一三	柳沢 康信	米本 純三	若松 佑子
				和田 勝	渡辺 守	大泰司紀之	

細目名：基礎ゲノム科学

細目内分割：基礎ゲノム情報科学 (総投票数 105票)

五條掘 孝	斎藤 成也	佐藤 矩行	宮田 隆
阿形 清和	小原 雄治	酒泉 満	武田 洋幸
赤坂 甲治	磯野 邦夫	岩見 雅史	浦野 明央
金久 實	小林 悟	鈴木 範男	成瀬 清
西田 宏記	相垣 敏郎	安部 眞一	阿部美紀子
石川 統	石川 裕二	泉 進	稲葉 一男
岩滝 仁範	岩本 幸英	岡野 俊行	小川 和男
尾崎まみこ	押田 龍夫	清原 貞夫	郷 通子
小金沢雅之	西駕 秀俊	嶋田 透	清水 信義
城石 俊彦	鈴木 直義	鈴木 實	炭谷めぐみ
西海 功	高橋 進	田代 康介	田中 実
徳永万喜洋	中井 謙太	長濱 嘉孝	中村 利孝
夏目 徹	西方 敬人	野中 勝	長谷川政美
濱口 哲	久富 修	廣田 洋	星 元紀
松浦 克美	三田 和英	水上 惟文	森下 真一
八杉 貞雄	安増 茂樹	山本 博章	山本 雅敏
横沢 英良	横山 茂之		

細目名：資源保全学

細目内分割：生物保全学 (総投票数 112票)

鷺谷いずみ	井口 泰泉	窪川かおる	矢原 徹一
松井 正文	馬渡 峻輔	石井 実	太田 英利
川那部浩哉	玉手 英利	常木和日子	西田 睦
樋口 広芳	松本 忠夫	森沢 正昭	東 政明
雨宮 昭南	伊澤 雅子	石井 一	石川 統
石田 健	内山 実	榎本 平	遠藤 秀紀
大森 信	尾定 誠	片倉 晴雄	加藤 真
上村 慎治	川島誠一郎	川野 絵美	菊山 栄
岸 由二	草野 保	国井 秀伸	小金沢正昭
近藤 矩朗	斉藤 隆	酒泉 満	佐藤 哲
佐藤 正典	四宮 明彦	島田 正和	白山 義久
鈴木 惟史	鈴木 秀作	住田 正幸	関谷 國男
高槻 成紀	竹内 康弘	田中 良明	田辺 信介
谷口 和久	団 まりな	筒井 和義	椿 宜高
藤條 純夫	堂前 雅史	中村 浩二	中村 健一

細目名：形態・構造 (総投票数 274票)

筒井 和義	高橋 純夫	竹井 祥郎	浦野 明央
内山 実	田中 滋康	長濱 嘉孝	菊山 栄
松野あきら	岡 良隆	野崎 眞澄	井口 泰泉
桜井 勝	笹山 雄一	藤 義博	沼田 治
倉谷 滋	高橋 孝行	守 隆夫	安部 眞一
市川 眞澄	町田 武生	溝口 明	大野 茂男
貝淵 弘三	片桐 展子	窪川かおる	真行寺千佳子
高田 邦昭	高橋三保子	月田承一郎	寺門 潔
長澤 寛道	中村 正久	朴 民根	濱口 哲
町田龍一郎	松田 洋一	道端 齊	山下 正兼
山本 雅道	青木 淳一	安倍 弘	石井 清
稲葉 一男	岩崎 雅行	岩見 雅史	牛木 辰男
白倉 治郎	榎本 平	遠藤 克彦	遠藤 秀紀
大谷・金子律子	大橋 一世	大日方 昂	織井 秀文
神谷 律	川本 恵一	木村 晋一	木村 正人
清原 貞夫	小泉 修	小谷 享	小林 浩士
小林 哲也	小林 牧人	小林 裕太	小林 幸正
嵯峨 堅	塩田 清二	白間 一彦	鈴木 秀作
鈴木 信雄	鈴木 範男	石 龍徳	高木 信夫
高城 忠	高森 久樹	保 智己	団 まりな
塚原 潤三	辻 繁	塘 忠顕	土肥 良秋
徳楽 清孝	栃内 新	富永 佳也	西川 輝昭
西川 道子	西塚 雅子	根岸寿美子	早川 洋一
林 純一	林 しん治	林 良博	疋田 努
兵藤 晋	藤島 政博	藤本 淳	藤原 晴彦
古田恵美子	牧岡 俊樹	松井 正文	松田 良一
松本えみ子	松本 二郎	馬淵 一誠	丸山 工作
水上 惟文	本川 達雄	安井 金也	八杉 貞雄
安田 恵子	山口 朗	山舗 直子	山内 兄人
山本 和俊	吉里 勝利	若原 正己	若松 佑子
和合 治久	渡辺 守		

細目名：動物生理・行動 (総投票数 446票)

高畑 雅一	沼田 英治	七田 芳則	富岡 憲治
岡 良隆	安藤 正昭	市川 敏夫	筒井 和義

上村 慎治	神谷 律	小泉 修	真行寺千佳子	塚越 哲	鶴崎 展巨	疋田 努	町田龍一郎
深田 吉孝	伊藤 悦朗	酒井 正樹	藤 義博	大塚 攻	窪川かおる	武田 正倫	野中 勝
道端 齊	松島 俊也	竹井 祥郎	水波 誠	遠藤 克彦	遠藤 秀紀	小林 幸正	笹山 雄一
山岸 宏	横張 文男	浦野 明央	大石 正	鳶 洪	谷口 順彦	常木和日子	星 元紀
尾崎まみこ	河村 悟	神崎 亮平	下澤 楯夫	松浦 啓一	道端 齊	八杉 貞雄	青木 淳一
大島 範子	大日方 昂	鈴木 範男	長山 俊樹	秋元 信一	浅見崇比呂	荒谷 邦雄	石井 実
松島 治	森沢 正昭	山下 茂樹	蟻川謙太郎	石井 清	石川 統	市岡 孝朗	今福 道夫
内山 実	小原 嘉明	窪川かおる	黒川 信	岩部 直之	大路 樹生	大島 範子	大塚 裕之
桑沢 清明	沼田 治	藤本 正昭	本川 達雄	大和田 守	奥谷 喬司	小野 展嗣	大日方 昂
山内 皓平	青木 清	石井 実	石井 直方	加藤 雅啓	金子 広史	鬼頭 研二	木下 泉
市川 眞澄	上田 宏	奥野 誠	尾崎 浩一	木原 章	熊澤 慶伯	後藤 晃	後藤 寿夫
加藤 義臣	菊山 栄	桑村 哲生	小林 牧人	駒井 智幸	小松美英子	三枝 豊平	酒泉 満
斎藤 建彦	佐藤 真彦	鈴木 教世	高橋 孝行	佐々木猛智	佐藤 正典	七田 芳則	清水 晃
谷村 禎一	寺北 明久	徳永 史生	馬場 昭次	真行寺千佳子	鈴木 仁	住田 正幸	高橋 純夫
針山 孝彦	日高 道雄	藤田 一郎	町田 武生	高橋三保子	多田内 修	田近 謙一	田辺 力
最上 善広	森 哲	山元 大輔	会田 勝美	団 まりな	土屋 誠	栃内 新	中村 浩二
芦田 正明	安住 薫	足立 伸次	安東 宏徳	並河 洋	成瀬 清	西岡みどり	西田 利貞
泉 進	岩切 稔	岩越 栄子	岩楯 好昭	沼田 英治	野田 泰一	平野 義明	広瀬 裕一
内田 克哉	遠藤 剛	椀 秀人	梶 真寿	深田 吉孝	福田 宏	藤田 敏彦	細谷 和海
粕谷 英一	片倉 晴雄	金子 豊二	岸本 健雄	細谷 浩史	堀 道雄	堀口 建雄	増田 隆一
北野日出男	木村 澄子	木村 正人	清原 貞夫	松島 治	松本 忠夫	丸山 工作	三浦 知之
久保 健雄	栗原 堅三	小池 達郎	小島 純一	水上 惟文	宮田 隆	村上 興正	毛利 孝之
三枝 誠行	酒井 彦一	佐々木正己	笹山 雄一	本川 達雄	森野 浩	矢田 脩	山崎 柄根
嶋田 一郎	清水 勇	菅原 隆	杉山 伸	山根 正気	湯浅 淳一		
鈴木 秀作	高田 啓介	高橋 純夫	高橋三保子				
武田 正倫	田中 実	中鉢龍一郎	塚本 勝巳	細目名：発生生物学		(総投票数 364票)	
津田 基之	豊田ふみよ	内藤 豊	内藤 富夫	浅島 誠	佐藤 矩行	井出 宏之	長濱 嘉孝
長井 孝紀	長尾 隆司	中川 秀樹	中川 将司	阿形 清和	西田 宏記	武田 洋幸	山下 正兼
中谷 敬	長濱 嘉孝	中村 正久	西田 睦	八杉 貞雄	星 元紀	鬼武 一夫	安部 眞一
西平 守孝	野崎 眞澄	野本 茂樹	長谷川寿一	赤坂 甲治	雨宮 昭南	小林 悟	岸本 健雄
長谷川宏幸	長谷川眞理子	服部 淳彦	林 文夫	吉里 勝利	大日方 昂	西駕 秀俊	桜井 勝
林 進	久富 修	日高 敏隆	平野てつ也	清水 隆	栃内 新	根本 心一	藤沢 敏孝
普後 一	藤島 政博	古郡 隆弘	星 元紀	若原 正己	井内 一郎	岩尾 康宏	上野 直人
細谷 浩史	松野あきら	松本 顕	松本 忠夫	加藤 秀生	倉谷 滋	嶋田 拓	田村 宏治
間野 勉	丸山 工作	水上 惟文	宮田 清司	中村 正久	真壁 和裕	馬淵 一誠	毛利 孝之
宮竹 貴久	宮本 薫	毛利 孝之	毛利 秀雄	猪原節之介	岡田 益吉	岡本 仁	黒田 英世
森 裕司	矢澤 徹	藪田 慎司	山本 芳実	立花 和則	田中 実	西方 敬人	野口 基子
吉里 勝利	和田 勝			野地 澄晴	濱田 博司	日野 晶也	茗原眞路子
				安増 茂樹	山本 博章	渡辺 憲二	相沢 慎一
				荒木 正介	岩松 鷹司	岩本 建雄	大隈 典子
				岡田 節人	奥野 誠	尾崎 肇	景浦 宏
				片倉 晴雄	川村 和夫	木口 憲爾	日下部岳広
				久保田 洋	黒岩 厚	小泉 修	後藤太一郎

細目名：生物多様性・分類 (総投票数 290票)

馬渡 峻輔	西川 輝昭	片倉 晴雄	松井 正文	岡田 節人	奥野 誠	尾崎 肇	景浦 宏
上島 励	西田 睦	太田 英利	白山 義久	片倉 晴雄	川村 和夫	木口 憲爾	日下部岳広
佐藤 矩行	雨宮 昭南	鈴木 範男	戸田 正憲				後藤太一郎

トピックス

第2回日本動物学会 OM 賞受賞報告

この2つの記事は、「学術の動向 2003・3」に掲載された記事と同様のものであり、日本学術協力財団からの転載許可を受けております。

生物学科学ニューズ編集委員

受賞が私にもたらしたもの

成瀬 真弓(なるせ まゆみ)

奈良女子大学理学部生物科学科非常勤講師
専門：動物生理学，時間生物学

私にとって絶好の機会に

平成14年3月下旬のこと、所属講座の教授から日本動物学会 OM 賞への応募を勧められた。私の第一声は「何ですか、それ?」。日本動物学会への篤志家 OM 氏のご寄付により平成13年度から設立された若手女性研究者を対象とするこの賞を、その年度の学会大会に出席しなかったこともあって、本当に恐れ多くかつ情けないことであるが、私はその時まで知らなかったのである(今後は、OM 賞のこれ以上の発展に何らかの形でお手伝いしていければと思う)。

自分の無知から半ば突然与えられたこととはいえ、申請テーマや助成金の使途等に非常に自由度の高いこの OM 賞への申請は、私にとって絶好の機会であった。長い間温めていた(けれど解ることはなかった)研究テーマが今どのような評価を受けるのか、賭けるような気持ちで、私は OM 賞への申請テーマ(「生物時計機構のどの段階が活動リズムの可塑性に関与するか」)を決めた。

生物リズムとその可塑性についての研究

私は母校の出身講座で学生実習の非常勤講師をさせていただいている。学部及び大学院では淡水魚の遊泳活動リズムを指標とした、生物リズムの研究に携わっていた。日本の河川や田んぼ等に一般的にみられる(といわれるが、実際にはなかなか難しい)淡水魚であるドジョウは、夜行性であると考えられているが、内因性の生物時計により駆動される生物リズムの観点からの研究はほとんどみられなかった。

私はこのドジョウの活動リズムを測定し、それを同調させる環境要因である同調因子との関係を調べることに

小早川義尚	小松美英子	古丸 明	近藤 滋
斎藤 建彦	坂井 雅夫	佐藤 英明	沢田 均
杉 晴夫	杉山 伸	平良 真規	高城 忠
田中 栄	千葉 和義	塚原 潤三	筒井 和義
恒川 直樹	出口 竜作	手代木 涉	徳元 俊伸
永田 三郎	中辻 憲夫	西田 育巧	沼田 治
野川 宏幸	野中 勝	橋本 有弘	畠山 正統
浜口 幸久	林 純一	広井 朋子	広海 健
深町 博史	藤原 晴彦	前田 芳實	松下 晋
見上 一幸	溝口 明	水上 惟文	藻沢 肇
森沢 正昭	矢尾板芳郎	山内 皓平	山口 朗
弥益 恭	山羽 悦郎	吉国 通庸	吉田 昭広
和田 洋	渡辺 明彦	渡辺 一雄	

細目名：進化生物学

(総投票数 215票)

佐藤 矩行	宮田 隆	斎藤 成也	片倉 晴雄
上島 励	馬渡 峻輔	八杉 貞雄	倉谷 滋
西川 輝昭	西田 睦	石川 統	岡田 典弘
河田 雅圭	酒泉 満	長谷川真理子	堀 寛
青塚 正志	阿形 清和	雨宮 昭南	巖佐 庸
粕谷 英一	熊澤 慶伯	桑村 哲生	高畑 尚之
和田 洋	赤坂 甲治	浅見崇比呂	木村 正人
西駕 秀俊	田嶋 文生	田村 宏治	徳永 史生
戸田 正憲	長谷川政美	松本 忠夫	青木 優和
蟻川謙太郎	池田 清彦	池原 健二	石原 通雄
遠藤 秀紀	大木 公彦	大塚 裕之	岡田 節人
岡野 俊行	岡ノ谷一夫	狩野 賢司	窪川かおる
郷 通子	五條掘 孝	小松美英子	三中 信宏
七田 芳則	嶋 昭紘	清水 勇	白山 義久
鈴木 知彦	鈴木 仁	瀬能 宏	大黒トシ子
玉手 英利	田村浩一郎	団 まりな	千葉 聡
塘 忠顕	鶴崎 展巨	寺北 明久	徳田 岳
徳永 幸彦	戸田 守	中嶋 康裕	仲谷 一宏
長濱 嘉孝	成瀬 清	西田 宏記	野崎 眞澄
野田 泰一	長谷川寿一	速水 格	福田 昌之
藤島 政博	布山 喜章	本多 正尚	増田 隆一
松井 正文	松浦 悦子	松尾 義則	丸山 工作
丸山 好彦	溝口 元	南方 宏之	水上 惟文
森脇 和郎	茂呂 同	矢原 徹一	山崎 正利
山崎 常行	横堀 伸一	吉里 勝利	

より、ドジョウの活動リズムは内因性のサーカディアンリズムであること、またこのリズムは光や温度、周期的給餌といった複数の同調因子の影響を受け、その発現の仕方が種内さらに個体内においても昼行性から夜行性まで変化しうる、非常に可塑性の高い生物リズムであることを見いだした。

時間生物学の研究が、生物時計の局在や時計遺伝子をはじめとする時計機構の分子生物学的な解明に主軸を移していく中で、活動リズムの発現の仕方や季節性（ドジョウの活動リズムはこれも示す）に関する私の研究は、傍流の古風なアプローチであり、また、“きれいな” (i.e., 均一な) リズムを示さない種は（消極的な意味で）こういう方向に仕事をまとめるしか仕方がないよね、といった批判も受けていた。

生物が生物リズムを獲得することは、様々に変化する環境下に生物が適応しながら生きていくことを保証する極めて重要な要素の一つであるが、その生物リズムが可塑的であることもまた、それを有する生物にとって非常に意義のある性質であると私は考え、この可塑性を生じる原因についての研究を続けたかったが、その後その機会には恵まれず現在に至っていた。

受賞が与えてくれた機会をいかに生かすか

5月下旬、学会事務局から OM 賞受賞の“第一報”が入った（実はその数日前から、周囲の数人が私に妙なほめかしをするので、もはや、とは思っていたのであるが）。研究助成金や求人等の公募に縁がなかった私にとって、これは初めてのことであり、今でもその時のことを思うと身が震える思いがする。

9月26日、学会大会中の総会での受賞式において（正確にはその前の楽屋から）、日本動物学会の学会賞をはじめとする各賞を受賞される先生方と同席しながら、私はなぜ自分が受賞できたのかをずっと考えていた。受賞の知らせを聞いた時、嬉しい半面で思わず辞退したくなったほど、私は不思議でならなかった。

大学院修了後、非常勤講師として母校に戻るまでの間にあちこちの所属を転々とした。いつまでも身の定まらない中で（それぞれの所属と研究分野で、単に研究テーマに留まることなく非常にいい勉強をさせていただいた。その時々分野でやっていくという選択肢もあったが、結局“可塑性”の低い私は昔のテーマにずっとこだわってきた。けれども、これまでの経歴はすべて今の私の糧になっているはずである）、このままではもう研究

で喰っていくのはあきらめた方がいいかも知れない、とくじけ始めていた私を、きっと OM 賞は励ましてくれているのだろう、と今は思うようにしている。次は、受賞自体で留まることなく、OM 賞が与えてくれた機会（もしくはそのきっかけ）を大切に、いかに生かしていくかにかかっているのだ。

最後に、日本動物学会ならびに OM 氏、また私の指導教官であり今回の OM 賞への応募を勧めていただいた大石正教授と研究室の皆様は心より感謝申し上げます。

動物学会 OM 賞を受賞して

向後 晶子（こうご あきこ）

田保健衛生大学医学部解剖学第一講座助手
専門：発生学

OM 賞応募のいきさつ

私は現在、藤田保健衛生大学医学部の解剖学教室で助手を務めている。この職に就いた2001年の春、研究室のメインテーマの1つであった家族性大腸腺腫症の原因遺伝子 APC の、上皮組織の発生における機能を解析しようと、基礎的な研究に着手した。ところが研究のターゲットを腎臓の発生に絞ってみると、むしろ APC と結合する DLG と呼ばれる因子が、腎臓の発生には深く関わっているのではないかと思わせるいくつかの観察結果が得られ始めた。その年の秋から年末にかけて、出産のため研究を中断したので、この研究をすぐに軌道に乗せることは出来なかったのだが、2002年の年明けに職場に復帰してから、改めて DLG をテーマにした研究に取り組みようと計画し始めた。

OM 賞の募集記事を見たのはちょうどその時期だった。科研費を申請したばかりで、自前の研究費を持っていなかった私にとって、「女性研究者の新しい研究プロジェクトの立ち上げを支援する」という趣旨の OM 賞は、まさに救いの神のように思え、さっそく応募した。

腎臓の発生と DLG

応募した研究テーマは、上皮細胞間接着の形成は、細胞の遺伝子発現パターンに影響を与えるか、というものである。上皮組織は、体内の臓器表面等を覆う特殊な組織であり、個体発生時に体内の各所で発生するが、その大半は、既存の上皮細胞が増殖することによって形成される。これに対し、腎臓の尿細管上皮は、上皮細胞とは全く性質の異なる間充織細胞が性質を変化させることに

よって生じるので、上皮細胞の発生、分化を解析するには格好の材料であるといえる。

当初、上皮細胞の発癌に関わる APC が、上皮細胞の発生においても重要な役割を果たしているのではないかと考えた私は、腎臓の発生過程に着目して研究を始めたのだが、対照実験のつもりで調べた DLG タンパク質が、むしろ APC よりも大量に腎臓に存在することがわかってきた。

そこで、東京大学の秋山徹教授から DLG 遺伝子の欠失マウスの腎臓サンプルを頂いてこれを観察したところ、これらに形態異常が見られることに気づいたのである。DLG は、そもそもショウジョウバエの癌抑制遺伝子産物として同定されたもので、無脊椎動物の上皮細胞で、接着構造を構成する因子の足場タンパク質として働き、細胞接着および細胞極性の形成を担うことが知られている。

私は、DLG の欠損による細胞間接着構造の異常が原因となって、形態形成に関わるその他の遺伝子の発現パターンの変化が生じ、これが腎臓の形態異常を引き起こすのではないかと仮説を立てた。これを検証し、DLG の機能を具体的に解明することがこの研究の目的である。もしも遺伝子発現パターンの変化を証明することができれば、「遺伝子発現 形態形成」という一般的な図式に、「形態形成 遺伝子発現」という一例を書き加えることが出来るのではないかと期待して、現在この課題に取り組んでいる。

受賞にあたって

私が大学院に入学してから今年でちょうど10年が経った。この間、4カ所の研究室に在籍し、移籍の度に、生殖内分泌学、細胞生物学、分子生物学、発生学と、かなり大幅に研究テーマを変えてきた。若いうちになるべくたくさんの分野や研究室を見ておきたいというのは自分自身の希望ではあったが、研究はそのたびにゼロから始めるわけで、なかなか業績を上げることが出来ずにもどかしく思うことも多い。

現在の腎臓上皮細胞の発生、分化というテーマに着手したのも現職に就いてからで、これに関して、まとまった形の業績はまだ挙げていない。そんな私よりも、ずっと立派な業績を挙げている若手女性研究者が多くいるのにも関わらず、私の研究テーマが受賞対象となったことは、正直に言って意外でもあった。

しかしこれまでに様々な特色をもった研究室で従事し

てきた研究を思い返して、自分なりに面白そうな新しいテーマを立案したことが評価されたのだと思うと、これまでの経験が役立つことが認められたようで、大変嬉しく思う。改めて、これまでにお世話になってきた諸先生方に感謝したい。

またこの賞は、決して「ご苦労様でした」という意味あいのもではなく、これからの研究をしっかりとやいなさいよ、という叱咤激励の意味が込められたものであると理解している。今回の受賞は、さあこれから、と言うときに背中をぼんと押してくれたようで、私にとって非常に大きな励みになっている。

OM 賞を創設された OM 氏、またその運営や選考に関わっておられる動物学会の諸先生方、事務局の方々に、深く感謝の意を表するとともに、この方々のご期待に添えるよう、これからも一層研究に励みたい。また最後に、私に研究者への道を勤めてくれた両親と高校の恩師、そして現在の研究生生活を全面的に支えてくれている同業の夫に、心から感謝したい。

会員異動

所属支部番号

1. 北海道, 2. 東北, 3. 関東, 4. 中部, 5. 近畿, 6. 中国・四国
7. 九州, 8. 海外

新入会 (4 / 10日現在)

日比野 拓 (3 ; 277-8562 千葉県柏市柏の葉5-1-5 東大新領域生命棟501 東京大学大学院新領域先端生命科学専攻遺伝システム革新学研究室) / 鈴木真美子 (3 ; 223-8522 横浜市港北区日吉3-14-1 慶應義塾大学大学院理工学研究所基礎理工学専攻生命理工学専修岡研究室) / Ramji Kumar Bhandari (7 ; 沖縄県国頭郡本部町瀬底3422 琉球大学熱帯生物圏研究センター) / 乾 雅史 (3 ; 153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系浅島研究室) / 杉本 薫 (3 ; 153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系浅島研究室) / 阿部剛典 (3 ; 153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科浅島研究室) / 新田和広 (3 ; 153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系浅島研究室) / 春日井隆 (4 ; 455-0033 名古屋市港区港町1-3 (財) 名古屋港水族館) / 岩本由華 (7 ; 812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号 九州大学生物資源環境学科動物生産科学コース畜産学分野動物学教室) / 信恵友基 (7 ; 812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号 九州大学生物資源環境学科動物生産科学コース畜産学分野動物学教室) / 矢部慎一郎 (3 ; 153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学・総合文化研究科・広域科学専攻生命環境科学系浅島誠研究室) / 本田佳子 (7 ; 812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番

(Z - 41)

1号 九州大学生物資源環境学科動物生産科学コース畜産分野動物学教室)/ 松山拓矢 (7 ; 812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号 九州大学生物資源環境学科動物生産科学コース畜産学分野動物学教室) / 雪田 聡 (3 ; 153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学15-16号館314教室浅島研究室 東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系浅島研究室) / 阿部道生 (3 ; 230-8501 神奈川県 鶴見大学歯学部生物学教室) / 辻衣里子 (7 ; 814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8丁目19-1 福岡大学理学部地球圏科学科適応機能生物学研究室) / 高原里佳 (7 ; 814-0180 福岡市城南区七隈8丁目19番1号 福岡大学理学部地球圏科学科生物分野進化脳科学研究室) / 藤井千之 (6 ; 700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学理学部生物学科) / 西松伸一郎 (6 ; 701-0192 岡山県倉敷市松島

577 川崎医科大学医学部分子生物学教室) / 殷 宏 (6 ; 739-8521 東広島市鏡山一丁目7番1号 広島大学総合科学部脳科学研究室) / 窪田敬士 (3 ; 157-0061 世田谷区北島山6-31-2) / 大杉知裕 (6 ; 739-8521 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部脳科学研究室) / 池亀天平 (3 ; 175-0082 東京都板橋区高島平5-28-12 東京大学大学院総合文化広域科学専攻生命環境科学系浅島研究室

所属・住所変更 (4 / 10日現在)

鈴木幸子 (3 3 ; 241 横須賀市平成町1-10-1 神奈川県立保健福祉大学生物学教室)

日本植物形態学会 3 賞受賞候補者の募集

日本植物形態学会は、植物形態学の発展に寄与した研究者を賞賛する目的で、以下の 3 賞を設けております。「日本植物形態学会賞」は、植物形態学の進歩に長年寄与し、植物科学の発展に貢献した研究者に与えられます。「平瀬賞」は、この賞を創設した1996年が平瀬作五郎によるイチョウの精子発見の百周年にあたることに因み、平瀬の功績を讃えてその名を冠したもので、植物形態学の進歩に寄与する独創的で優れた論文を、高い評価を受けている国際誌に発表した著者に与えられます。「日本植物形態学会奨励賞」は、植物形態学の分野で将来の活躍が期待される若手研究者に与えられます。各受賞者には、総会において賞状と記念品を授与いたします。

これまでの受賞者は以下の方々です。

- 第 1 回 形態学会賞：原 襄
平 瀬 賞：植田勝己・長船哲齊
奨 励 賞：藤江 誠・塚谷裕一
- 第 2 回 形態学会賞：田中建治
平 瀬 賞：箸本春樹
奨 励 賞：峯 一郎・石丸八寿子
- 第 3 回 形態学会賞：黒岩常祥
平 瀬 賞：江原友子・田中一郎
奨 励 賞：泉 好弘・松永幸大
- 第 4 回 形態学会賞：菅井道三
平 瀬 賞：鯨島正純・本村泰三
奨 励 賞：東山哲也・松山 崇

- 第 5 回 形態学会賞：植田勝己
平 瀬 賞：蓮沼仰嗣・日詰雅博
奨 励 賞：唐原一郎・稲田のりこ
- 第 6 回 形態学会賞：堀 輝三
平 瀬 賞：今市涼子・野口哲子
奨 励 賞：金 昶泰・柴田 洋・西村芳樹
- 第 7 回 形態学会賞：大隅正子
平 瀬 賞：黒岩晴子
奨 励 賞：紅 朋浩・宮城島進也

日本植物形態学会 3 賞受賞候補者募集要領

1. 応募資格：各賞とも本学会員に限ります。特に年齢制限はありませんが、奨励賞は、応募する年の12月31日において、満40才未満でなければなりません。
2. 応募方法：各賞とも他薦、自薦を問いません。7月20日（必着）までに、資料を日本植物形態学会事務局に送付して下さい。詳しくは、下記（4）にお問い合わせください。
3. 選考方法：選考は日本植物形態学会によって設けられた選考委員会によって行われます。
4. 問い合わせ・応募書類送付先：〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2 横浜市立大学大学院総合理学研究科・日本植物形態学会事務局・庶務幹事・田中一郎
Tel: 045-787-2217, FAX: 045-787-2370, Email: itanaka@yokohama-cu.ac.jp

(社)日本動物学会関東支部ニュース

(http://www.soc.nii.ac.jp/zsj/sibu/kantou/kantou.html)

2003年6月 97

平成15年度 第二回支部委員会議事録

日 時：平成15年3月13日(木) 17:00~19:00

場 所：上智大学10号館3階322会議室

出席者：中村正久(支部長), 伊藤正則, 岩室祥一, 小林牧人, 佐藤 恵, 杉本雅純, 高田耕司, 成瀬 清, 兵頭 晋, 安増茂樹(各支部委員), 町田武生(評議員)

報告事項:

1. 平成15年3月29日に上智大学で開催される第55回関東支部大会の準備は順調に進んでいるとの報告がなされた(安増)。発表演題数は60の予定。

審議事項:

1. 支部総会議事次第について審議し承認された。
2. 平成14年度決算案と平成15年度予算案が提出され審議された後、承認された。
3. 平成15年度支部主催シンポジウム企画案が披露された。
4. 来年の第56回関東支部大会は、東京大学本郷キャンパスで行うことが提案され承認された(成瀬)。
5. 支部選出理事について中村支部長より理事会の報告があり、それに基づいて議論された。

(文責 安増庶務委員)

平成15年度 関東支部総会議事録

支部総会が、平成15年3月29日(土)14時から上智大学図書館 L-921教室にて開催された。議長に林しん治会員(横浜市大・院理・機能科学)を選出した後、以下のように議事が進行した。

1. 55回支部第大会長挨拶(青木清会員上智大・生命研)
2. 支部長挨拶(中村正久)
3. 庶務報告(安増茂樹): 1) 関東支部会員は一般会員690名, 学生会員202名, 中高教員会員33名, 高齢会員32名, 名誉会員2名の合計959名(3月11日現在)。2) 2002年の活動報告54回関東支部大会2002年3月30日(早稲田大学国際会議場), 支部主催シンポジウム「フェロモンの動物学 - 他の個体の行動を引き起こす不思議な物質 -」2002年7月20日(東京大学大学院総合文化研究科13号館1313教室), 支部後援「第8回「性と生殖」公開シンポジウム行動生殖神経内分泌学の展開: 生殖行動と保育行動」2002年11月9日(早稲田大学総合学術情報センター井深ホール), 評議員と関東支部委員の選挙(2002年8月), 代議員の選挙(2002年11月)。
4. 会計報告 平成14年度決算案報告(菅原 隆), 平成14年度決算監査報告(黒川 信): 決算報告は承認

された。

5. 平成15年度予算案提出(岩室祥一): 予算案は承認された。
6. 平成15年度と16年度の会計監査委員に岡まりな会員と上島 励会員が推薦され承認された。
7. 2003年支部企画報告(黒川 信): 支部主催シンポジウムとして、「山野を走り 大陸を越え 海を渡る - 動物たちの移動の謎を追う -」を2003年7月19日に東京大学理学部理学2号館大講堂にて開催の予定。
8. 次回(第56回)支部大会開催校の神谷 律会員(東京大・院理・生物科学)より、東京大学山上会館(2004年3月29日予定)にて開催である旨挨拶があった。
9. 支部規定改正案が提出された(安増茂樹): 挙手による投票の結果全員一致(出席34名)改正案が承認された。改正案は以下の通り。

「関東支部規定細則第2条支部委員選挙(6)支部委員に退会・転出・長期不在などの理由により欠員が生じた場合は、支部委員として一年以上活動できる場合に限り、次点以下を繰り上げて支部委員とする。」の下線部を退会、転出、長期不在、その他に改正する。

(文責 安増庶務委員)

平成14年度 決算案

1. 収入の部

科 目	予算額(円)	決算額(円)
平成14年度支部会費		
第1回分	592,000	592,000
第2回分	200,000	184,000
支部大会費収入	100,000	82,700
雑収入(利息等)	500	108
今期収入合計	892,500	858,808
前期繰越金	1,253,407	1,253,407
合 計	2,145,907	2,112,215

2. 支出の部

科 目	予算額(円)	決算額(円)
支部大会費	400,000	286,430
企画費	300,000	159,698
支部ニュース印刷出版費	150,000	105,000
選挙管理費	300,000	190,610
旅費・交通費	20,000	7,960
消耗品費	10,000	815
雑費(送金手数料等)	10,000	2,310
今期支出合計	1,190,000	752,823
次期繰越金	955,907	1,359,392
合 計	2,145,907	2,112,215

平成15年度 予算案

1. 収入の部

科 目	金額 (円)
平成15年度支部会費第1回分	532,200
平成15年度支部会費第2回分	150,000
支部大会費収入	100,000
雑収入(銀行利息等)	100
今期収入合計	782,300
前期繰り越し金	1,359,392
合 計	2,141,692

2. 支出の部

科 目	金額 (円)
支部大会費	400,000
企画費	300,000
支部ニュース印刷出版費	150,000
旅費・交通費	80,000
消耗品費	10,000
雑費(送金手数料, 郵便費等)	10,000
今期支出合計	950,000
次年度繰越金	1,191,692
合 計	2,141,692

動物学会関東支部大会後記

大会委員長 青木 清

第55回日本動物学会関東支部大会は、2003年3月29日(土)、上智大学で開催されました。上智大学での開催は約20年ぶりのことです。交通の便が良いこともあったのでしょうか、参加者185人、ポスター演題60と、関東支部大会としては例年の大会に劣らないものでした。若い研究者や大学院生がファーストオーサーになった演題が多く、熱気ある討論の輪を随所に見ることができました。分子レベルから、細胞、個体、集団のレベルまで、動物の生命現象を多様な切り口で解析した多様な演題が集まったことみても、動物学会は、魅力ある、他に例をみない研究者集団となっています。多くの若い研究者が育ってくることを期待します。総会では、議事録にもあるように、次期大会が東京大学・本郷キャンパスの山上会館を中心にして行うことが決まりました。シンポジウムは「脳研究の最前線 - 分子からシステムへ - 」というタイトルで開催しました。脳科学の先端的研究で国際的にも活躍されているお二人の脳科学者、三品昌美先生(東大教授)には「神経回路網制御分子と脳高次機能」という演題で、藤田一郎先生(大阪大学教授)には「脳が作る三次元世界: 側頭葉とステレオ立体視」という演題で講演いただきました。両先生の秀れた研究成果は、脳研究のおもしろさを参加者に伝えることになったのではないのでしょうか。なにより、両先生の研究遂行の姿勢は、専門を異にする方々にもイ

ンパクトとなったことでしょう。最後に催された懇親会にも約60名の方の参加を頂き、友好と学術交流を深めることができたことと思っています。

本大会が無事成功裏に終わったのも、参加いただいた方々の協力をはじめ、学会運営のために働いてくださった準備委員会メンバーの努力があつてのことです。ここに厚く感謝の意を表します。

動物学会関東支部大会感想記「第55回動物学会関東支部大会に参加して」

廣井準也(聖マリアンナ医科大学・解剖学)

桜の花がほろび始めた3月29日、上智大学で開催された関東支部大会に参加して参りました。大会は午後から始まったのですが、60題近いポスター発表、シンポジウム「脳研究の最前線」、そして夕方からの懇親会と、わずか半日の間に非常に有意義な経験をさせていただきました。

学会には、共通の問題を扱う研究者が集う非常に専門性の高い面もあれば、生物学のような大きな土台の下で多様な現象を扱う研究者が集まり、それぞれがいわば「他流試合」を楽しむような面もあるのではないかと、いう気がします。今回、私は後者の面を重視して「他流試合」に挑むつもりでポスター発表に臨みました。魚類の浸透圧・イオン調節に関する内容を発表したのですが、これまでに面識のなかった先生方に自分の仕事内容を紹介することができ、私自身これまでに思いつかなかったような点を指摘していただけましたので、予想以上の成果を得られたと思います。

シンポジウムでは東京大学の三品昌美先生が「神経回路網制御分子と脳高次機能」について、大阪大学の藤田一郎先生が「脳が作る三次元世界」について講演されました。上智大学の青木清先生がお二方を「世界の脳研究の最前線を走るトップランナーです」と紹介されたのですが、門外漢の私にとっても非常に勉強になりました。ただ、両先生の第一線の研究に比べて自分の研究はなんてスケールが小さいんだろうと意気消沈してしまった面もあったのですが、懇親会で渡邊浩先生が「流行に乗るのではなく、自ら流行を作り出すという気概を持ちなさい」とおっしゃられたのを聞いて、やる気が再び湧いて来た次第です。最後になりましたが、大会の運営に当たられました上智大学生命科学研究所の皆さまに深くお礼を申しあげます。

「生物科学ニュース」の購読・ご利用のおすすめ

近年の生命科学の進歩はめざましく、新しい分野が次々と開かれ、その結果として新しい学会や雑誌が次々と設立・刊行されると共に、日々各種の会合がめまぐるしく催されております。もはや個々の学会や個人がこれらの情報を処理していける時期ではなくなってきております。

この時代に対処してゆくために「生物科学ニュース」は日本動物学会および日本植物学会の和文情報誌として、会員への情報伝達、広報はもちろん、生物学に関連した学会・国際会議・シンポジウム・講演会・研修会などの開催予定とプログラム、人事・研究助成金などの公募記事、書評、関連分野の動向などを中心に、幅広く生物科学関連ニュースをもりこみ編集・刊行されています。

「生物科学ニュース」は両学会の約5,000名の会員に配布されていますが、会員以外の個人の方あるいは機関でもご購読いただけます。この機会にぜひご購読くださいますようお願い申し上げます。ご送付先、お電話番号など明記のうえ下記あてハガキ、またはファックスなど書面でお申し込みくだされば折り返し請求書・振込用紙などお送り申し上げます。

記

「生物科学ニュース」 月刊（毎月20日発行）/ B5判 / 毎号平均22頁

編集・発行 生物科学ニュース編集委員会（日本動物学会・日本植物学会）

年間購読料 3,100円（税込・送料無料）

購読料は原則として年間前払いでお願いしております。

ご希望の月号からご購読いただけますが、1月号から12月号までの12冊を一期間としますため、途中月号からの購読の場合は初年度のみ月割の購読料となります（下の例示のとおり）。以降は購読中止のご連絡をいただかない限り翌年に自動継続し1月号から12月号のサイクルで更新させていただきます。

機関購読の場合はご送付先にご担当の個人名をお入れください。

お支払いに際し特定の書類が必要な場合は作成いたしますのでご連絡ください。

見本誌ご希望の場合はお送りいたします。

すでに購読ご登録の場合はご容赦下さい。

本年度購読料 3,100円 × 9 / 12 = 2,325円

次年度購読料 3,100円（年間購読料が改定された場合は別途ご案内します）

〒113-0021 東京都文京区本駒込5 - 16 - 9

財団法人 日本学会事務センター 事業部

「生物科学ニュース」係

TEL . 03-5814-5811 FAX . 03-5814-5822

関連記事掲載を御希望の方は、「生物科学ニュース」最新号を参照の上、記事を簡潔にまとめ、下記編集局宛にお送り下さい。編集委員会が関連記事と認めた場合には無料で掲載させていただきますが、様式の統一のため記事の手直しを行なうことがあります。なお、編集委員会では記事の要約表現の改訂を独自に行なうことがあります。また学会や研究会が独自の記事を出したい時には、その都度必要なスペース（“ひろば”欄）を買い切ることができます。“ひろば”の校正は買い切られた方をお願い致します。

料金：1ページ（2,000字） 40,000円

1/2ページ（1,000字） 20,000円

1/4ページ（500字） 10,000円

記事送付先：〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-2 東真ビル 生物科学ニュース編集局

原稿をお送り下さる場合、以下の点にご留意下さい。

1) 生物科学ニュースに原稿をお送りいただく場合は、生物科学ニュース編集局 (bsnews@bsj.or.jp) に、電子メールの本文または添付書類（テキストファイル、マイクロソフトワードまたはアップルワークス書類に限る。ファイル名に拡張子を付ける。）で、Subject に「ニュース原稿」と記入の上、お送り下さい。フロッピーディスクを郵送いただいても結構です。なお、修飾文字や特殊文字をご使用の際は、同時にプリントアウトしたものをファックス（03-3814-6216）にてお送り下さい。図表等のファイルについては、予めご相談下さい。書式等は生物科学ニュース最新号をご参照下さい。

2) 現在のところ、書評欄への投稿は受けつけておりません。

3) 掲載原稿の締切日（必着）は以下の通りです。

No.380 2003年8月号 2003年6月16日（月）

No.381 2003年9月号 2003年7月14日（月）

No.382 2003年10月号 2003年8月11日（月）

No.383 2003年11月号 2003年9月8日（月）

No.384 2003年12月号 2003年10月14日（火）

No.385 2004年1月号 2003年11月17日（月）

No.386 2004年2月号 2003年12月1日（月）

No.387 2004年3月号 2004年1月12日（月）

運営委員会

社団法人 日本動物学会 蟻川謙太郎・久保英夫・窪川かおる (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/zsj/>)

社団法人 日本植物学会 杉山宗隆・作田正明・米田好文 (<http://bsj.or.jp/>)

編集委員会

社団法人 日本植物学会 青木誠志郎・澤 進一郎・中西 史・矢部尚登・作田正明 (幹事)

社団法人 日本動物学会 小畑秀一・鈴木 忠・服田昌之・吉田 学・久保英夫 (幹事)

発行 (社)日本動物学会・(社)日本植物学会 生物科学ニュース編集委員会 〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-2
東真ビル / FAX 03-3814-6216

印刷 昭和情報プロセス株式会社 〒108-0073 東京都港区三田5-14-3 TEL 03-3452-8451

購読申込:(財)日本学会事務センター事業部 / 〒113-0021 東京都文京区本駒込5-16-9 学会センターC21
TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822
